

“常識” という慣れの怖さ

(株)ベルックス 高橋 康 範

「勤務中はもとより、通勤時においても絶対に事故を起こさないように」 当たり前のことであり、誰もがそう願って日々生活している。また、私は、仕事の事でもよく上司に質問するが、時としてその答えは「常識の範囲内でやればいい」である。確かに、自分の経験からくる常識の範囲内で行動していれば、怪我もせず程々に仕事も出来る。

振り返ると、「労災について、会社や上司から何度も言われなくても大丈夫、常識ですから～。それよりも、もっと仕事の面で高度な内容を指導してほしい」などと、労働災害という重要な問題を随分軽く考えていた時期の自分がいた。

ところが、実際に労災事務処理の担当者となり、幾つかの発生事例を確認していて驚かされた。その多くが、本人の不注意が原因で起こっているのである。例を挙げれば、「冬道で転倒」「作業中に梁に頭をぶつけた。ドアに指を挟まれた」等々、日常生活でも起こり得る単純な事故は殆どなのである。

これほど労災防止が強く叫ばれ、会社もそして働く者も十分に意識しているはずなのに起こる事故。何故？と考えたとき、過去の自分の姿と重なるのである。「仕事を早く覚えたい。もっと上手になりたい」と、先へ先へと目がいき、新しいことばかりを覚えようと夢中になる。与えられた様々な業務にかかわり、入社当初に教えられた基本を、“常識” という衣で覆い疎か

にしている自分に気付かされるのである。

「絶対に事故を起こさない！」と、一人一人が強い気持ちをもつことが大切」「相互の点検活動と職場環境の整備」等、個人として組織として、日常から心掛けていはずの事故防止。ところがである。常識として当たり前のようにこなす毎日の仕事の中に、少しずつ入り込んでくるのが、“慣れ” である。怪我をすることの恐ろしさも薄れて、気が付いたときには～。

周囲から見ると極めて危険と思われる所作も、本人にとっては日常のこととして処理される。また、お互いに注意し合うべきところを、遠慮して言わなかったり、「〇〇さんだから大丈夫だろう」との思い込みが黙認につながったりする。いつもと同じ事をしていれば大丈夫という甘えが、職場にスキをつくってしまうのかも知れない。

先程述べた冬道の転倒事故。昨年も履いていた冬靴だからと、点検せず安易に使用した結果である。擦り減った靴底、滑りやすい道路状況等、様々な原因が考えられる。時と場合に応じた対応の欠如、それが“慣れ”。

「労災を起こさないのが当たり前、常識的に処理していれば事故は発生しない」 今こそこうした見方・考え方を改めなければと強く思う。これまでの自己を率直に見直し、労災担当者としては勿論、社会人としても、身の回りの変化をしっかりと見据えて業務に向かおうと決意している。

平成19年度 労働災害防止論文 銀賞

『労働災害防止』について

(株)東洋建物興業 辻 本 英 樹

テレビでは、クレーン車が横転して、大事故になっているニュースが流れている。毎年のように、同様の事故を見るが、何故プロが行なう業務で事故が無くなる事が無いのだろうか。この機会に当社が取り組んだ、労働災害防止委員会の活動について、報告したい。

私たちビルメン業界も、労災事故は決して無縁という訳にはいかないのが現状だと思う。十年以上前になるが、当社でも清掃、警備と数件短期間に労災事故が発生した事があった。

普段であれば、めったに発生しない労災事故であるから、後処理をきちんとする事だけを考えて、又業務に戻っていたと思う。しかし全ての報告を受け終えた、当社代表から突然「会社全体として、危機感が全く無い。直ちに、対策本部を立ち上げるぞ。」である。正直管理職全員、驚いたのが本心であるが、その日の内に、労働災害防止対策本部を立ち上げ、社長が本部長に、副社長が副本部長に就き、発生した労災事故に対して、原因の調査、管理職の日頃の指導、教育の在り方、毎日の朝礼に至るまで、徹底的に調査した。

事故発生の要因としては、①時間に余裕の無い出勤で、あせるあまり滑る路面で店頭し、捻挫や骨折した。{生活サイクルを変えることに対する抵抗。} ②危険な事は理解しているが、自分だけは大丈夫という過信。③考え事や悩みが有り、ふと行った行為で、自分や他人を怪我させてしまう。

ほぼ、この三点に集約される。これらの事は当然各社でも、従業員には指導、教育しているはずであるが、当社では対策本部として、次の各項目に従って、対応することとした。

①飽きずに、あきらめずに、ともかく、あらゆる機会を捉えて労働災害事故防止について話をする。②大勢に一度に聞かせるのでは無く、二、三人単位で通勤労災、労災防止の方法を従業員と話しあう。③管理職により巡察や巡視を増やし、職場の現役、仕事の進め方、取り組みかた等、研究する。④ヒヤリ・ハットを隠す体質をやめさせ、それを職場に反映出来る環境を現場責任者と作る。{恥ずかしい、叱られる等意識改革} ⑤労災事故の情報は、知り得た事をパートさんに至るまで知らせる。{情報の共有}

これらの事からまず管理職が、全ての現場を自分の現場として捕らえ、実行した。今迄の管理職の在り方を問われたら、自分の現場で精一杯、セクトで充分が、本音だと思う。会社代表の一言から会社全体として捕らえる意識が芽生え、管理職全員で、対応する組織になった。私達の業界全体の課題である「労働災害防止」は、経営者始め、管理する管理者が、発生した事故や事件に、本気で向き合い、いかに立ち向かうかにかかっている。労働災害を起こしてしまった従業員を、強く叱った。今から思えば、私達管理職が、真剣に対応していなかつた事が、原因のような気がしてならない。

以上

姉の交通事故に学ぶ

北海道クリーン・システム(株) 中戸川 あい

もう8年も前のことですが、3歳年上の姉が事故に遭いました。昼頃、歩道・車道の区別もない細い十字路で、姉は自転車でアルバイト先に向かっている途中でした。ぶつかった車は運送会社に勤めている若い男性が運転する小さなトラックです。幸いにも姉は奇跡的に回復し、現在では結婚して子どもにも恵まれて幸せに暮らしていますが、多少後遺症は今でも残っているようです。

事故当時は加害者の男性に強い怒りを感じましたが、姉が幸せに暮らしている今、もう怒りはありません。むしろ、運送会社の社長に付き添われて謝りに来た、不安げな加害者の印象ばかりが心に残っています。まだ20代半ばと若く、本当に普通の男性でした。まして、ドライバーとして働いていたのですから、人を傷つけたというショックの他に将来への不安、姉の様態等、どんなにか恐ろしかったらうと思います。

事故の原因の一つは、姉がイヤホンで音楽を聴いていたことです。もしも聴いていなかったら、車通りのない細い道だったので、トラックが近付いて来る音に気が付いていたでしょう。また、事故がこれほど大きくなった原因は、運転手が本来徐行すべき道で、徐行を怠った事です。両方とも普段の生活ではちょっとした事であり、つい見落としてしまいがちな事なのに、それらが組み合わさって大きな事故になってしまいました。

「事故の悲惨さ」は姉の事故直後の痛ましい

姿や、毎日仕事や家事をこなしながら看病を続けた両親の姿、そして加害者の男性の不安そうな顔と共に今も私の心の中に根付いています。事故とは「特別な時・特別な場所で・特別な人が」で遭うものでなく、「いつもと同じ時・同じ場所で・普通の人」が被害者、あるいは加害者になってしまうものなのだと痛感した出来事でした。

通勤時間は、まさに「いつもと同じ時・同じ場所で・普通の人」が多く行き交っている時間です。しかも急いでいる人が多く、普段よりも注意力散漫になりやすい時間帯でもあります。「急いでいるから」「遅刻しそうだから」と自分に言い訳をしながら交通違反をしがちな時だからこそ、人と譲り合うこと、交通規則を守ること、左右の確認を怠らないことなどを心に刻みながら出かけたと思います。

当社は現在「デイ・ライト運動」を実施しております。デイ・ライト運動とは昼間にライトを点灯する事で運転者の交通安全意識を高め、他の運転者や歩行者にライト点灯車両の存在等を認識してもらう事で注意を喚起し交通事故防止を図るというものです。もしもトラックがライトを点けていたら、姉は音ではなく光で車両に気が付き、事故は起こっていなかったかもしれません。姉の事を教訓として、私もデイ・ライト運動を日々呼びかけたいと思います。小さな事でも毎日こつこつと行うことで、必ず交通事故は減っていくと信じています。

平成19年度 労働災害防止論文 佳作

業務災害体験と対策

(株)メルファム北海道支社 津越 由紀恵

私は、この清掃の仕事を始めて一年目を過ぎた所です。長年この清掃に関わって来たベテランの方々に比べれば足元に及びません。ベテランの方々より、経験不足だとか未熟だと思われる中、学生以来手に取ったのがモップと自在ほうきでした。清掃の仕事の事を知らない人は、たかがモップでしょ？って言われます。たかがモップって言われる存在でも誤った使い方や置く場所、立て方によって凶器に変わる事を教えられました。最初の頃は何も分からないままのスタートでしたので、モップ、自在ほうきの使い方もままならず、作業道具を特定の安全な場所に置く事なく、あちらこちらに置いてみたりしていました。それは、時間に追われる焦りや余裕も無かったからです。階段の踊り場の所で十分に安全なモップの立て方をしていなかったのか、局員さんがその踊り場から階段に登ろうとした時にその踊り場に立ててたモップの杖が局員さんの身体に当たってしまいました。幸いに身体にちょっと触れた程度だったのですが。同じ清掃員同士の間でも、特に定期清掃中は状況の悪い中、時間の制限の中では焦りが出て仲間の持ち変えたモップの杖が私の目に当たりにぶっかりそうになったりした事がありました。作業道具の使い方、置き方、置く場所次第で凶器に変わると言う事です。作業をする場所の周りや、その場の状況、安全を確かめて、そしてその場所を行き交う人達を気遣う気持ちを持つ様に心掛けています。モップの杖は人に凶器を

与えるだけではなく、局の機械類にもし杖が当たって破損の可能性もあり得えるのです。周りの人達はきつこの話しを聞いたら、そんな小さい事だって思われるかも知れませんが、小さな一つ一つの事から業務災害に繋がっているのです。そして共に働いている清掃員同士で注意を呼びかけ合う事も大事です。お互いに助けたり、助けられたりと、私も他の清掃員の方達のお陰で、時々余裕の無い私の気持ちを解してくれる事に感謝しています。それだけでも業務災害を無くすきっかけにもなると思います。たかがモップって言われてる私のモップは、清掃作業には一番大事な存在です。他の道具もそうです。落ち着いて、焦らず、そして常に注意を意識して安全に仕事をして行きたいです。まだ一年足らずで経験不足ですが、一年て言う慣れに流されないで、一日一日無事故で頑張ります。



平成19年度 労働災害防止論文 佳作

ヒヤリ・ハットを体験して

北海道クリーン・システム(株) 弥田 三也

私は、当社に入社して、早くも1年8ヶ月が経過しました。

私の職場の業務内容は、JR北海道旭川駅の駅舎清掃及び発着する列車の車内清掃が主たる業務です。

私は、列車の車内清掃を担当しておりますが、ただ車内を綺麗にすれば良いと言う時代は過ぎ去り、多くのお客様がご利用されるお店（駅）という観点から接客サービスを提供し、お客様に安全・安心・快適な旅をしていただける車内清掃に取り組んでおります。

接客マナーも勿論のこと、私たちの職場は鉄道輸送という公共性の高い職場であり、『安全の確保を最優先に業務の運営に努め、安全・安心・高品質なサービスを提供する』を大前提に従業員一丸となって取り組んでいます。

昨年、こんなヒヤリ・ハットを経験してしまいました。

北海道の自然の中を時速130km/hで運転する特急列車では、運転席窓ガラスに虫等が付着し、油が染み渡り見づらくなるため、ガラス清掃作業を行います。非常に危険が伴う作業となります。

列車の頭上には、約2万ボルトの高圧電流が流れている架線が通っています。約2.5メートルの耐電棒を持って、線路上に降りて洗浄液で前面ガラスを洗います。私の当日の業務は、運転席ホーム側のため線路上に降りないでホーム上からの作業で、洗浄ブラシ（耐電棒）の先についているスポンジに洗浄水を浸して作業開始、

腕を伸ばして力を入れたとき、体勢を崩してホームから落ちそうになったのです。とっさに、運転席の窓ガラスの下の方にしがみつき、幸いホームから転落することは免れましたが、心臓がドキドキ、足がガクガクしていたことを思い起こします。

原因は、ホームの端に置いたバケツからこぼれた線浄水で滑ってしまったのです。一歩間違えば線路上に転落です。「何をやっているんだ」と自分の心の中に問いかけ、深呼吸を何回か繰り返して、気持ちを落ち着かせて作業を終わらせました。

早くこの場から立ち去ろうと考えながら作業詰所に戻り、事象を報告したところ、ケガはないかと聞かれ、ありませんと答えると、いきなり先輩から気合いを入れられました。お前一人の事故ではなく、職場全体で、絶対起こしてはならない事故であり、この種の事故は生命に関わり、一度起こすと会社に与える信用の失墜は計り知れなく、また、失った信用を取り戻すには大変な時間が必要なことをいましめられました。

このことが、きっかけとなり少集団グループ活動の取り組みテーマとなり、個々人が実際に体験したヒヤリ・ハットを集め、ヒヤリ・ハット体験集を作成しました。みんなで知恵を出し合って作成した行動目標を、みんなで守ることが最も大切であることを再確認し、職場全体が事故ゼロに向けて取り組んでいます。

今後も継続してヒヤリ・ハットを貴重な教訓として活用できるよう、行動してまいります。

平成19年度 労働災害防止論文 佳作

私が出来る環境改善への近道

(株)ベルックス 久津間 早 紀

最近、メンタルヘルスという言葉をよく耳にします。その意味は、「心の健康管理」。

総ての職場が、そこで働く人たちにとって常に最適な環境にあるとは限りません。複雑に変化する現代社会にあっては、むしろ多くの人が、様々なストレスを感じながらも懸命に働いているのが実態ではないでしょうか。

同僚やお客様を含め、多くの人と接することも、複雑な人間関係を生みます。また、メンテナンスに携わる職種の場合、たった一度のミスが重大事故につながる可能性があり、それがお客様の信用を損なうことにもなりかねません。ここでは、常に細心の注意を払い続けることが求められるのです。

そうした状態は、体と同時に心をも疲れさせてしまいます。単なる疲れであれば、休みをとることである程度回復しますが、ストレスのかかる環境状態が長く続いた場合は、心身の疲労は蓄積し、精神的にも不安定な状態になります。高じていくと、判断力も鈍り、これまでの経験や技術も生かされなくなってしまいます。自ずと仕事の能率も下がり、それを補うために残業も～。ゆっくりと休息をとることなどは、ますます難しくなります。

こうした悪循環に陥ると、ひどい場合は重い病気を引き起こし、長期間の休養も必要となります。誰かが業務を引き継いだとしても、仕事の面ではどうしてもスムーズさを欠きます。伴って職場全体の能率も低下、仕事が替わったことによる万が一の事故も懸念されます。業務の

負担が増すことで、中には健康を害する人が出てこないとも限りません。

毎日を職場で過ごす人たちにとって、職場の環境条件が健康に与える影響はとても大きいのです。心身共に健康で働くことは、本人の日々の生活を充実させるのみならず、会社の経営自体にも影響してくると言えます。会社は、「職場の環境」を決して軽視することなく、また、働く人たち一人一人も、職場の雰囲気や仕事の仕方を再現見直し、ストレスを生まない職場環境を共につくる努力をしていくことが必要ではないでしょうか。

職場の環境改善には、上司・同僚を問わず社を挙げた取組が必要です。勿論、それは一朝一夕で叶うことではありません。しかし、今出来ることがあります。“自分の気持ちを少しだけ変えること”、これはすぐにでも一人で出来るはずです。些細なストレスは、自分の捉え次第で軽減出来ると思うのです。

人とコミュニケーションをとるのが苦手な人もいます。でも、挨拶するだけでも、そこにつながりが出来るのではないのでしょうか。たとえ返事が無くても、その人の耳にはきっと届いているはずです。人は一人では生きられません。同様に、どんな仕事もたった一人では出来ません。直接間接に、陰に陽に多くの人々とつながり、支えられて成り立ちます。

私が出来る環境改善への近道、それは、いつのときにも、お互いへの思いやりの気持ちを忘れずもち続けることと信じ、努力します。